

## 書評

小島 清

## 『國際經濟理論の研究』

東洋經濟新報社 1952年 327頁 420圓

## 1

古くして新しい國際經濟理論を不斷に新らしくし、前進せしめてやまないのがわが小島清助教授である。助教授はこの分野においてすでに「自由貿易理論の研究」(昭和23年)および「外國貿易」(昭和25年)の二つの體系的著書によって、新しい國際經濟理論の向うべき方向を明示された。比較生産費に加うるに比較弾力性および比較成長率の諸理論を以て動態的な國際分業原理を確立することが助教授の研究のプログラムであったし、今後もその整備發展を目指しているものと理解せられる。戦後國際經濟の不均衡が經濟の深奥部における失衡に根ざしていると思われる場合において、表層的または部分的な理論によっては全き對策を見出し得ないことはいうまでもない。とくに戦後日本經濟の問題が價格的矛盾に加えて構造的矛盾を包蔵していることを思えば、これを解明すべき理論が經濟の安定を重視する先進國の一方的理論で足るわけはなく、さりとて後進國の孤立的な保護理論では一層不十分であることも明らかである。先進國と後進國を併せ含み、相互の矛盾を克服して調和を見出すごとき國際經濟の理論的基礎を見出すことが新しい國際經濟理論の課題である。後進國的色彩を強めた戦後の日本經濟を前にして、わが國の國際經濟學者が、その立場の如何を問わず、追求して來たものがこれであったことも當然といわねばならぬ。そして小島助教授はその動態的國際分業の原理によってこの課題に迫り、さらに一層の前進を期している人なのである。

「國際經濟理論の研究」一巻はかかる前進のための足がためとして研究された貴重な成果をまとめたものである。かかるものとしてそれは系統的な體系書といわんよりは問題論的研究の集積で、ここかしこに配置した礎石の吟味が主となっている。そこでは終極的なねらいである動態的國際分業原理の積極的展開はないが(この業を著者は別業において構想しつつある一序文)、その基礎となるべき足場の検討を通じて、やがて築かるべき包括的で総合的な著者の國際經濟理論の體系は彷彿せしめるに足るものがある。従って、ここでは本書内容の細部に亘る紹介を避けて、むしろ礎石の配置を通じて見た著

者の國際經濟理論の構想を読みとることに主眼を置くを適當とするであろう。

## 2

本書の内容は3編8章から成る。第1編「國際經濟學の展望」では、國際貿易理論の展開(第1章)、海外國際經濟學の動向(第2章)、わが國國際經濟理論の展望(第3章)を収め、古典學派からの貿易理論の發展の跡を辿り、さらに1930年以降國際經濟理論における問題意識の轉機とそれに基く理論の展開を海外について展望し、さらに主として戦後におけるわが國國際經濟學界の展望を通じて、わが國の斯學の特徴を明らかにし、その中において著者自身の立場と方向とを描き出している。著者自らが展望の中に組み入れられるので、苦心の跡が偲ばれるが、戦後わが國の國際經濟學の研究において著者の果しつつある役割は何人もこれを認めるに吝ではないであろう。

ちなみに、著者は本書50頁において、後進國と先進國の立場の調和のために、海外投資と國際貿易憲章のプランに期待する者の1人として私の名を擧げて居られるが、そのこと自體は事實であるとしても、それだから私が動態理論の樹立を必要でないと考えているように解して居られるのは私の眞意に反する。拙稿「國際經濟不均衡の視點」(國民經濟雜誌、昭和27年9月號)はこの誤解を解いてくれるであろう。

第2編「國際均衡論序説」にはリカードの國際均衡論(第4章)、J. S. ミルの國際均衡論(第5章)およびグレーアム「國際價値の理論」(第6章)を含む。とくに重要なのは前の2章であって、ここで著者はリカードとミルを解釋しなおし、従來の通説を顛えす大事業を遂げた。即ち、リカードは比較生産費の原理において交易條件の定まる限界を明らかにしたにとどまり、具體的に交易條件を決定する條件を明らかにしたのがミルの相互需要説であるという通説に對して、リカードについては比較生産費例に連結環としての金を導入することにより、金移動の總體的調整を通じて生産要素交易條件が變化し、國際均衡が成立することをリカードの所説に照らしつつ詳密に立證する。他方、ミルについては相互需要の價格効果を通じての個別的調整を説いたにとどまらず、さらに深く需要變動の轉換効果=所得効果を通じて總體的調整が説かれていることを明らかにする。この點については著者の國際均衡論の構想とともに、著者の體系の中心をなすと考えられるので、後で今少し立入ることにしよう。

第3編「最近の國際經濟理論」は爲替市場の安定性

(第7章)と外國貿易乘數(第8章)から成り、ともに新しい理論の整頓と再吟味に捧げられている。爲替市場の安定性論は外國貿易乘數理論とともに1930年以後の國際經濟理論の收穫と見られるもので、對外經濟と國內經濟との一貫的把握において大きな前進を意味する。ともに極めて複雑な事象を數學の武器を用いて細密に分析するので、理解に困難の多いものである。著者は多くの學者の理論や方式を極めて順序よく整理し、複雑な關連の理解に資するとともに、その效用と限界を明らかにしている。

3

著者の理論體系との關連において最も重要と思われるのはリカードォとミルの再解釋であるが、そこで著者は次のごとき著者自身の國際均衡化メカニズムの試論的な構圖を掲げている(148頁、第14表)。

—所得配分秩序—

	1. 消費均衡	2. 生産均衡	3. 貿易面
總體的調整	1a. 輸入への所得支出額變化	2a. 輸出産業の雇員數變化	3a. 輸出入の量的變化
	1b. 所得水準變化	2b. 賃銀率・物價水準變動	3b. 爲替相場・生産要素交易條件變化
個別的調整	1c. 需要弾力性	2c. 供給弾力性	3c. 商品交易條件變化

この構圖において、著者は市場均衡をみざす個別的調整(C)の背後に總體的調整を据え、經濟の均衡はこの二つの調整によって導かれること、従ってそれは表層面にあらわれた價格不均衡のみならず、深く基礎的な不均衡を読みとり、また價格の變動論に加えて經濟の成長を見る動態論の立場を表現していると解せられる。

リカードォとミルがこの総合的な著者の構想に照らして讀みなおされた。そして得られた結論は、リカードォもミルも不完全ではあるがこの構想をみたすものを備えているということになる。この場合、「リカードォは生産均衡(2)を『商業上の競争』即ち各産業間での利潤率均等化に向つての競争という生産費原理を中心として展開した。その集約的表現は2bの賃銀率・物價水準變動に表れ、貿易面では結局3bの生産要素交易條件變化になる。そして彼は消費均衡は所與のものとし、さらに2a, 2c, 3a, 3c等の細い點は問はず、それらすべてを『商業上の競争』という言葉の中に含ませた」。これに對し、ミルは需要を導入して消費均衡面を補った點に貢獻があるわけであるが、「この需要側の問題の導き方は必ずしも満足すべきものではない。その最大の缺陷はリカードォの中心とした生産費原理を明確に組み入れなかつた、またそれと所得効果および價格効果との關連を強く自覺しなかつたことにある。」(148—9頁)。

かくて、著者の論難の對象たるいわゆる通説がリカードォが比較生産費のみを明らかにし、ミルが相互需要のみをとり上げたというのであれば、その見解は明らかに偏面的にすぎる。併し、通説は國際均衡論を必ずしもかように狭く解したのではなくて、比較生産費の原理や國際價值論のほかに、いわゆる物價—正貨流出入機構に基づく國際均衡調節機構論をも加えて、古典學派の國際均衡論を理解する用意をもっていたことも忘れられてはならない。そして著者自身も認められるごとく、リカードォが需要論を缺き、ミルが生産費原理を明確に組み入れなかつた點を強調すれば、リカードォは比較生産費の原理において、そしてミルは相互需要説において各々独自の貢獻をなしたと見る解釋は必ずしも著者の見解とは甚だしく矛盾するものではないであらう。

4

とはいえ、通説がリカードォやミルを餘りに偏面的に取扱ひすぎたこと、また貿易論と貨幣機構論とを餘りに截然と區分しすぎたこと——このことがまた偏面的解釋の原因ともなつた——はこれを十分に認めなければならぬ。この點において著者がその抱懐する包括的な體系に照らして、リカードォやミルを解釋しなおし、通説の偏面觀を是正せられたことは大きな功績といわなければならぬ。

さらに積極的にはリカードォとミルをいかに著者自身の體系の中で生かすかの課題が残るわけであるが、リカードォ的な生産要素交易條件の變化による總體的調整については、すでに著者において比較成長率の理論が用意されており、ミル的な商品交易條件の變化による個別的調整については比較弾力性の吟味による爲替市場の安定性論が展開済みである。従って、著者の比較成長率の理論と爲替市場の安定性論とに基づく動態的な國際經濟學はリカードォとミルとの近代的綜合ともいふべきであらう。この學說史的研究を足場にし、最近の國際經濟理論上の公器を縦横に驅使して、力強い動態的國際經濟學の全面的展開を期待しているのは私1人ではない。

幸いにして、小島助教授は目下イギリスで鋭意研究中であり、さらにアメリカに渡つて研鑽を重ねられると聞く。その前進は一層加速せられるものと期待する。遙かに小島助教授の健康を祈りつつこの書評の筆を擱く次第である。

(藤井 茂)